

イナゴの効率的防除（第2報）

小嶋 俊彦・川村 清隆・近藤 篤・大野 文彦

近年、水稻のコバネイナゴは滋賀県下全域で発生が増加している。本報では、環境に配慮した本虫の効率的防除法を検討した。

1. 方法

- 1) 試験場所：竜王町山之上
- 2) 散布薬剤（散布量）・時期：ピリダフェンチオン MTMC粉剤DL（4 kg/10 a）を1993年6月28日に散布した。
- 3) 散布方法（図1）
 - (1) 全面散布：背負式動力散粉機（曲り噴頭使用）で畦畔を含め、水田全面に散布した。
 - (2) 額縁散布：背負式動力散粉機で、畦畔から3.3 m（11列目）の範囲に畦畔を含め、額縁状に散布した。
 - a. 水田・畦畔歩行散布（曲り噴頭使用）：水田と畦畔を別々に散布した。
 - b. 畦畔歩行散布（多口噴頭使用）：多口噴頭（長さ2.8m）を使い、畦畔から散布した。
 - c. 畦畔歩行散布（曲り噴頭使用）：畦畔から水田へ噴口を向けて散布した。
 - (3) 畦畔散布：背負式動力散粉機（曲り噴頭使用）で畦畔に散布した。
- 4) 調査方法：散布直前、散布4日後（7月2日）、8日後（7月6日）、11日後（7月9日）に口径36

cmの捕虫網を使い、各区1か所（畦畔から1.5m地点）で20回振りの齢別虫数を調査した。

2. 結果および考察

- 1) 薬剤散布時のコバネイナゴの齢構成は、1齢7.4%、2齢38.3%、3齢54.3%で4齢以上の幼虫は認められなかった。
- 2) ピリダフェンチオンMTMC粉剤DLの額縁散布の防除効果は高く、全面散布と同等の効果が認められたが、散布11日後では、畦畔歩行散布（曲り噴頭）の効果はやや低くなった。また、畦畔散布では、無散布と比較して本田の密度抑制効果は散布11日後まで認められたが防除効果は低かった（図2）。
- 3) 10 a当たりの散布時間は、額縁散布の水田・畦畔歩行散布が全面散布の2/3、畦畔歩行散布（曲り噴頭）1/3、畦畔歩行散布（多口噴頭）および畦畔散布が1/4であった。また、散布薬量は全面散布に対し、額縁散布1/2、畦畔散布1/10であった（図3、4）。

以上の結果から、コバネイナゴに対する6月下旬～7月上旬の額縁散布による防除は、省農薬、省力的で、かつ全面散布と同等の防除効果が期待できることが分かった。また、多口噴頭を使用した額縁散布は、曲り噴頭使用に比較して、さらに省力的、効率的な防除法と考えられた。

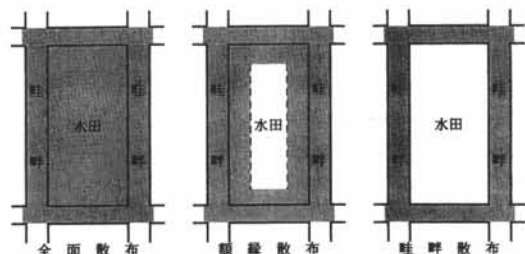


図1. 薬剤散布方法

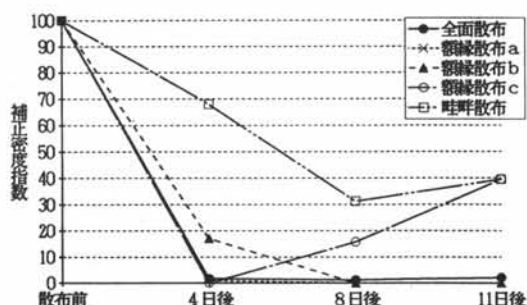


図2. 防除効果（薬剤散布：平成5年6月28日）

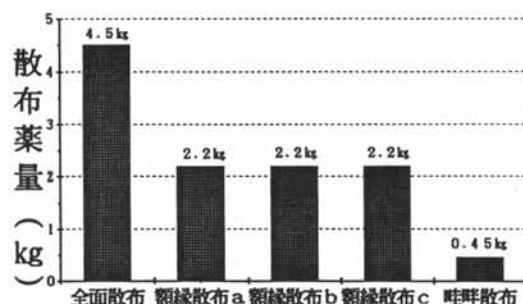


図3. 散布薬量

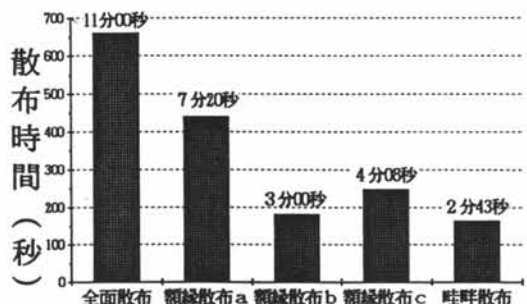


図4. 散布時間